

青森県リンゴ総合実験農場の現状と将来

木 村 甚 弥

(青森県りんご試)

青森県におけるリンゴ栽培の現況は栽培面積(25,000ha)の約3分の1を占める8,200haにおよぶ傾斜地リンゴ園は自然条件の劣悪に加え、逐年深刻化する労働力不足および、生産経費の高騰のため、生産者の経営が年ごとに困窮におこまれつつある。この問題は青森県だけでなく、傾斜地果樹園の多いわが国全般の問題でもある。

これらの情勢からみて、青森県では農林省の助成のもとに、代表的傾斜地リンゴ園の集団する南津軽郡平賀町大字唐竹字水上地区の農家28戸の集団園地、19.4haを青森県りんご総合実験農場として設定し、つぎの二つの基本課題を主点として、昭和41年から同44年までの5年計画で、大規模機械による技術体系および品種更新に関する試験を実施し、その成果を農家群の経営の場にあてはめた場合の経営的評価について検討し、傾斜地リンゴ園における経営改善のための体質改善の指針を得ることにした。

1. 傾斜地リンゴ園における機械化技術体系の確立

生産基盤の整備と各種作業機械を導入して、機械化を中心とした省力的な作業体系を組み立て、現行の所要労働力の4割、さらに将来は半減できるような作業体系に改善し、その中心となる技術は、大型SSによる傾斜地りんご園の共同防除である。

2. 品種構成の改善

当実験農場の設定当時の品種構成の割合は、国光41.2%、紅玉19.5%、デリシャス系20.2%、印度・ゴールデン・デリシャスなど含めて約20%となっている。これらの品種構成は津軽地帯の一般的の品種構成に比べて、国光・紅玉の比率は多少緩和されるとは云え、まだ両品種にかたより過ぎているので、さらに収益性の高いデリ系、新品種などの比率を高くして、労働力の配分調整と停滞しつつある現在の収益性を向上させるようにする。品種の更新は各自園の品種構成の実態と立地条件によって、適当な品種を選択し、高接更新、苗木更新方法をとる。

以上の基本課題を遂行するため、昭和40年7月の実験

農場発足とともに、運営体制を整え、農場側との話し合いの上、農場全体についての測量、一筆ごとの樹数(品種、樹令)、土性、地形などについての実態調査を実施した。この実態調査の結果にもとづいて、農道、用水施設、耕作道などの基盤整備、および品種更新などについて計画を立て、随時具体的に作業を進め、昭和41年度で一部耕作道を残して基盤の整備はほぼ完成している。一方大型機械としてのSS3台をはじめ、モノレール、草刈機その他計画どおり機械の導入も大体完了している。以上のように実験農場として発足して以来昨年度にかけては、主として実験のための準備期間であったわけであるが、3年目を迎えた昭和42年度からは本格的な実験の段階に入って、計画どおり作業の機械化と品種更新が着々進められている。

当実験農場の基本課題としての傾斜地の機械化体系が実施されると、4年目で労働時間が40%位短縮され、それによって農場全体としての労賃が1時間当り80円と計算しても年間330万円以上の節約が見込まれている。一方品種更新は高接更新と苗木およびわい化砧の利用などで推進されており、一時収量の減退が止む得ないとしても7年目からは増収に転じ、10年目で農場としての収益が年間130万円以上の増加が試算される場所である。しかし一方実験事業による年間の経営は、購入機械、基盤整備など全額負担として計算した場合、機械の減価償却費、資本利子など年間諸経費は約331万円が見込まれる。したがって実験農場の経営に要する収支は、農場開設8年目(昭和47年)で収益が出はじめ、その後逐年増加し、昭和50年(11年目)には約130万円(10a当り約6,700円)の黒字が試算されている。

以上のように実験農場としての成果のあらわれるまでには、かなりの長期間を要するわけであるが、従来傾斜地果樹園の機械化がとかく敬遠されがちであったものが、この実験農場の成果によって傾斜地果樹園の近代化が推進されるならば、わが国傾斜地果樹園の経営改善に画期的な効果が期待される場所である。